きずな

目次

May 2016 No.21

巻頭言
大学で何を学ぶか　岩崎　勝彦　4

特集1
100％自然エネルギーのエコ・キャンパスをめざして
――省エネ・創エネプロジェクト　鮎川　ゆりか　5

特集2
千葉商科大学創立90周年に向けて
巣鴨経専の思い出　小嶋　清一郎　21

特集3
社会に羽ばたく卒業生
――平成27年度学部学位記授与式を挙行　26

特集4
希望に満ちた新入生
――平成28年度学部入学式を挙行　35

社会に巣立った卒業生
商大で変われたこと　石井　直樹　48
大学生活を振り返って…　齋藤　沙希　49
～誰にでも変われるチャンスはある～
インタビュー　きずな編集委員会　50

同窓会活動
本部からの報告　広報・IT委員会　57
卒業祝賀会開催（大学・同窓会共催）　57
第46期 第2回常任理事会開催　57
第3回常任理事会開催　58
第4回常任理事会・第2回理事会開催　58
支部長会からの連絡　第15回支部長会定期総会　59
支部からの報告　60
同期会からの報告　62
OB会からの報告　69

C O N T E N T S

同窓生寄稿
　過ぎし時から現代へと
卒業生のお宿・お店紹介　矢島　久　70

随筆

わがふるさと　母校に思う　広報・IT委員会　坂本　周男　70
介護職員初任者研修に参加して　鎌田　光宣　72

教育後援会活動

千葉商科大学へのご入学に際しまして　宮下　律江　73
平成28年度以降の教育後援会について　学生課　74

CUCの教育

企業と連携してビジネスに挑む　商経学部　学生団体『CUC Student's Company (CSC)』　76

■ニュース・イベント　77
瑞穂会所属、商経学部石井直樹さんが難関の税理士試験に合格！　81
商経学部三田村ゼミ生が「第16回日経ＳＴＯＣＫリーグ」入選！　82
ダブル・ディグリーのプログラム1期生が中国留学へ！　82
ボウリング部川上諒さんが全日本大学個人選手権大会で優勝！　83
本学付属高校2年持田早智さんがリオ五輪競泳女子８００ｍフリーリレー出場へ！　84

CUCレポート

■メディアで紹介されたＣＵＣの報道一覧　85
■キャリア支援センターニュース
インターンシップに積極的参加しましょう　川瀬　功　86
■地域連携推進センターニュース
第６回ＣＵＣ地域連携フォーラムを開催　90
第14回キッズビジネスタウンいちかわ　92
学生のボランティア活動（こぼれ話）　92

退任された教員より

本学奉職の経緯について　齊藤　壽彦　93

著書紹介

『政策研究を越える新地平：政策情報学の試み』
編著者：中道 寿一、朽木　量　朽木　量　94

▼同窓会支部事務局一覧　98　▼編集後記　100

■巻頭言

大学で何を学ぶか

岩崎 勝彦 ● 千葉商科大学同窓会 会長（平成19院）

大学生の定員確保のために、一頃流行った外国人留学生の積極的受入れの流れが変わった。昨今では首都圏の大学が地方の自治体と連携し学生のUターン就職を支援するとか、あるいは地方の大学もこれに負けじと、地元企業との接点を増やすことで地元定着を目論んでいるという報道が目につく。更に、我が子を心配するあまり、学生生活を積極的に支援?する父兄の存在も世の中の風潮となりつつある。いずれも、減少する学生を対象としている点では共通する傾向といえよう。

しかし、学生にとって果たしてこのような状況は問題ないといえるのだろうか。講義やゼミ、部活や付き合い、他方アルバイトによる生活費の捻出など、時間はいくらあっても足りない。また若い世代の社会常識の欠如や社会悪ともいえる誘いや行為に対する判断力や免疫力の低下が問題になっている。

ここで見えてくるのは、「学生は大学で何を、誰から、どのように学ぶべきか」について、近視眼的風潮に捉われすぎではないのか、と懸念されることである。

社会に出るまでには、自分の価値観中心で動いても大学や父兄によってチェックされる環境にあるが、社会に出た途端「社会常識」という全く別の価値観によって動かざるを得ない。つまり、他人の価値観で自らの人生を左右されるのである。果たしてその心構えを学生はどのようにして体得出来るだろうか。

キャリア形成について書かれた『京都花街の経営学』（西尾久美子著）では、20歳前後の舞妓が3～4年間の厳しい修行を経た後は、芸妓（いわば個人事業主であり、芸と教養を備えた洗練された女性）として厳格な業界の中で、独立して生き抜くことが業界の慣わしとされる。

この巻頭言を終えるにあたり、ある業界のプロの言葉「自分を信じられる自分になることが出来るか」を新入生に贈るエールとしたい。

商大で変われたこと

石井 直樹
税理士法人メディア・エス
平成28年3月 商経学部商学科卒
（市立川口高等学校出身）

学位記授与式で表彰を受ける
石井直樹さん

私は千葉商科大学在学中に税理士となることを志し、大学4年生の時の試験で合格することができました。もちろんたくさん勉強しましたが、私がこんなに勉強するなんて高校生の頃の自分にはとても想像できなかったことだと思います。私は商大に入学するまでとにかく勉強が嫌いでした。もっと言えば努力をすることが嫌いでした。しかし、商大に入学し、瑞穂会に入り、簿記の楽しさを知りました。簿記1級の取得後は同じく簿記の試験である税理士試験の簿記論に挑みました。受かる自信はあったのですが結果は惨敗でした。得意科目である簿記で負けたことは、今までに味わったことのない悔しさを覚えました。そこから半分復讐のつもりで税理士を目指すことを決めたのですが、思っていた以上に税法の勉強が奥深く楽しいものでしたので、途中から純粋に税理士になりたいと思って勉強をしていました。そして最初に税理士試験を受けた大学2年生から合計3回の試験で5科目合格者になることができたのです。私は学生生活の多くを勉強に充てましたが、青春を犠牲にしたとは思っていません。むしろこのように思いっきり学ぶことも青春そのものだと思うし、勉強の合間に友人と遊んだり、楽しいこともたくさんありました。

当初は大学に進学するつもりのなかった私ですが、母親に説得され、高校の先生には商大を勧めてもらい、結果的にたくさんの良い経験をすることができました。税理士の勉強により専念するため、無理を言って一人暮らしをさせてもらった両親には感謝してもしきれません。そう思えるようになったことも商大に入学したからこその感覚だと思います。

思えば商大に入学して良かったことしかないように感じます。

大学生活を振り返って…
～誰にでも変われるチャンスはある～

齋藤 沙希
千葉商科大学事務局学生課勤務
平成28年3月 商経学部商学科卒
（弘前実業高等学校出身）

「とりあえず授業に出て、適当に4年間過ごしていれば卒業できるよね」「津軽三味線さえ弾ければ大学生活なんてどうでもいい」。入学当初の私が毎日思っていたことです。意欲も目標も特になく、毎日ゆるっとした大学生活を過ごしていました。

そんな私の学生生活が一変したきっかけは、職員の方との会話の中にありました。何気なく書いて提出した研究基礎の課題から、津軽三味線の演奏活動を行っていることが教職員の方々に広まりはじめた頃のことです。職員の方に「あなたの経験があなたの音につながっていると思う」「学生時代しか経験できないこともいっぱいあるから、今のうちに思いっきり何にでも挑戦してみたら」という言葉をかけていただきました。この言葉によって、経験・吸収した一つひとつのことに意味があって無駄なことはないということに気づきました。

千葉商科大学には、学生が輝けるためのチャンスがたくさんあります。念願の目標であった第27回津軽三味線全日本金木大会における仁太坊賞の受賞が果たせたのも、力強い応援のおかげでした。決して私一人の功績ではなく、家族・友人・教職員の方々をはじめ、たくさんの方に支えていただいたからこそ受賞することができたのだと感じています。もし千葉商科大学での大学生活を選んでいなければ、受賞はもちろん卒業すらできなかったかもしれません。それほど私にとって千葉商科大学での大学生活は人との縁に恵まれた温かい時間でした。

卒業式を終えた今、新社会人としての生活がスタートしました。環境が変化し、寂しさを感じることもありますが、今後は千葉商科大学卒業生として周囲に感謝し、目標に向かって挑戦し続けたいと思います。

今回の「社会に巣立った卒業生」のコーナーでは、今春本学を卒業され、4月から新社会人として活躍されている石井直樹さんと齋藤沙希さんから寄稿いただきました。『きずな』編集委員会では、お二人のこれまでの活躍がすばらしいことから、4月中旬に本学卒業生であります神田尚久さん（平23 経済卒）がお二人にインタビューしました。

石井直樹さんに伺いました！

―ご卒業おめでとうございます。税理士法人に入社されたそうですがどうですか。

楽しくやっています。やりたいことをやっているというのが一番ですね。学生時代からこの法人でアルバイトをしていて、職場の雰囲気も好きです。

―何人ぐらいで仕事をされていますか。

35人ぐらいです。この業界では多いほうだと思います。

―高校生の時に日商簿記2級を取得されていますが、その原動力は何でしたか。

高校に商業科に似た学科があって、そこで簿記の授業があり、全員が簿記2級まで受験するのでその流れで取りました。

―大学進学にあたり、他にも簿記を教える大学はあったと思いますが、なぜ本学に進学されたのですか。

母親が大東文化大学に見学に行ったこともあって、その大学に進もうかと思って高校の先生に話したら、簿記をやるなら千葉商大に行けと言われて。

―商大に入学後、すぐ瑞穂会に入ったそうですが、その時のモチベーションはどんな感じでしたか。

高かったかもしれないですね。ゲームでも何でも、やると決めたらやるというタイプなので（笑）。

―すばらしいですね。簿記を勉強していてつらかった経験はありますか。

簿記ではそんなにないですが、簿記の後、税理士の勉強を始めた時、1年目は半分嘗めている部分もあって落ちてしまい、2年目に一気に4科目に増やしました。大学も2年の秋学期だったのでゼミ活動も増え、ダブルスクールや瑞穂会もあり、1人暮らしも始めたので、その時はもう大変で不眠症になりました。

―簿記の楽しさって何でしょうか。

神田尚久さん（インタビュアー）

Interview

もうパズルを解いているような感じですね。簿記から派生して税法を勉強していましたが、やはり世の中の仕組みを知ることができるということですね。それは本当に思いますね。

—すばらしいですね。今こうして税理士法人で働いておられるので、ご家族の方もさぞ喜んでいらっしゃると思いますが。

はい、そうですね。特に母親はとても喜んでくれましたね。

石井直樹さん

—今後のビジョン、キャリアについて教えてください。

当初は税理士の資格を取ったらいずれ開業してという考えでしたが、今はとにかく覚えようということで精一杯です。

—税理士試験の時と覚えることは違いますか。

違いますね。税理士試験はあくまで試験で、実務では試験でカバーできないところがたくさんあり、その部分はフォローしていかないといけません。資格の世界はその先が広いので。

—空いた時間は何をされていますか。

テレビを見たりゲームをしたり勉強したりですね。

—やはり勉強はつきものなんですね。

そうですね。その日経験したことは一旦復習しないと身につかないので。あとは自分でテーマを決めて勉強したりしています。もう仕事に就いているので、次に行くお客様のところの予習をする時間に充てたりしています。

—行く末は独立したいということですか。

そうですね。そんなに大きく構えたいわけではなくて、ひっそりとやっていきたいですね。そういう働き方をしたいです。

—お話を伺うと、すごくバイタリティにあふれ、負けず嫌いなのかなと思いましたが。

税理士試験の1回目に落ちた時は本当に悔しかったですね。

—落ちて悔しい思いをして次こそはという思いがあったと思いますが、どのくらい勉強されたんですか。

少なくても1日5時間以上は勉強すると決めていました。

—もし簿記に出合わなかったらどうなっていましたか。

怖いですね。まだゲームをやっていたかもしれませんね。今でもやっていますが(笑)。

—きちんとビジョンができているから将来が楽しみですね。

これから自分がどうなるかというより、自分がどれぐらいの知識を持ってやっていけるかということのほうが楽しみですね。いろんなところと触れ合える職なので。

—今後、商大に入学して税理士を目指す高校生にアドバイスはありますか。

税理士試験は、受験条件が日商簿記1級なんです。大学3年生の8月の試験は、単位の要件を満たしていれば受験できますが、2年生から受けるとなると簿記1級が必須なので、必然的に1年生の11月に1級を取らないと受験できません。仮に3年生の8月から税理士の勉強を始めるとなると2年間では厳しいですね。

—伺っているととても良い青春を過ごされたように感じますが。

そうですね。周りにはあまりわかってもらえないですけどね(笑)。勉強ばかりやっていて楽しいのかということで。でも、本当に楽しかったですよ(笑)。

—座右の銘はありますか。好きな言葉とか今の仕事に結びつけられる話とか。

簿記の話になりますが、収益と費用の性格・関係性について、費用と収益は対応しているものだということですが、収益は成果、費用は努力だといわれているんです。そして、費用と収益は結ばれるもので、努力の先に収益があるということですね。だから、費用と損失の違いというのがありますが、損失というのは自分のプラスになるものに結びつかないんですが、費用と捉えると何か得るものがあるんです。

—すごいですね。最後にゼミはどちらですか。

吉田正人先生のゼミです。同じゼミにこの春卒業した齋藤沙希さんという方がいて、学位記授与式で一緒に表彰されました。

—そうなんですか。吉田先生は2人も優秀なゼミ生がいて鼻が高いでしょうね。本日はありがとうございました。石井さんの今後のご活躍に期待しています。

(4月9日インタビュー)

Interview

齋藤沙希さんに伺いました！

—ご卒業、そして第27回津軽三味線全日本金木大会での最高賞受賞おめでとうございます。4月から本学職員として学生課に勤務されていますがいかがですか。

入局後すぐ奨学金の手続きが始まり、慌ただしい毎日ですが、周りの方が優しくサポートしてくださるので毎日楽しいです。

—青森県の弘前実業高校出身と伺いましたが、本学に入学した動機は何ですか。

最初は岩手の大学と思っていましたが、演奏活動をしていた時お客さんから津軽らしさが足りないと言われ、津軽って何だろうと思いました。ずっと津軽にいたのでそれが当たり前で、津軽弁も標準語と思って話していましたから。それで、離れた場所から見れば津軽らしさがわかるのではと思い、まず関東エリアに絞り、その後、当時担任の先生から千葉商大を紹介され、オープンキャンパスに参加した時、インスピレーションでこの大学だと思いました。千葉なら流通も盛んで、経済を勉強するのに相応しいと思い千葉商大に決めました。

—千葉にいらして5年目ですが今でも津軽弁は出ますか。

今でも日常会話は津軽弁で、職場や青森県以外の人と話す時は標準語を使うようにしています。英語を使う時と同じ感覚で、頭の中で標準語に変換して言うようにしています（笑）。

—大会の時はどんな気持ちでしたか。

緊張しましたが、年1回の大会なので去年よりは楽しく、自分が満足するように弾ければいいと思って臨みました。

—最高賞発表の瞬間はどうでした。

前年は決勝トーナメントの1回戦で敗退したので、結果が発表された時は、まさか自分がというのが率直な感想です。

—前年、敗退した時はどんな気持ちでしたか。

自分で勉強不足な面もわかっていたし、対戦者がとても上手い方でしたので、ああやっぱりな、という感じでしたね。来年はもっと成長しないといけないと思い、民謡の基礎を一から勉強し直しました。

—小学校2年生から始めたということですが、どなたの影響ですか。

津軽三味線を弾く齋藤沙希さん

保育園の卒園式で地元の演奏者が弾くのを聴いてかっこいいと思いました。親に話したら猛反対されましたが、小学校2年生の時、よさこいと津軽三味線を親に披露する機会があり、三味線担当に立候補しました。その時、やはり三味線がやりたいと思い再度親に話しました。母親は反対でしたが今度こそと思い、洗濯物を干したり料理したりしている母親の背中をカセットデッキで民謡を流しながらしつこく追っかけ回し、それで、もううるさいから1回やってみろということでやらせてもらいました。

―齋藤さんが最高賞を取った時、お母さんはどんな感じでしたか。

びっくりし過ぎてもう涙も出ないと言っていましたが真っ先に喜んでくれましたね。表彰式の時は会場の一番後ろで泣いていました。

―本学に入学後、研究基礎の授業を通じてある職員と出会い、勇気づけられ、後押ししてもらったと伺っていますが、その職員は誰ですか。

今キャリア支援センターオフィスにいらっしゃる仁平さんです。

―その時の心境はどうでしたか。

見た目は真面目な学生でした。でも目標が特にない中で声をかけていただき、その時感じたことは、せっかく4年間過ごすのにこれでいいのかと改めて思い、いい卒業式を迎えたいと思い直しました。4年先のことまで考えてしっかりやればやった分、三味線にもその影響が出てくるという言葉をいただき、やってみようと思いました。

―最高賞を受賞するまでには幾多のつらい経験やトレーニングがあり、また一方で楽しかったこと、良かったこともあったと思いますが。

トレーニングとしては、毎日三味線に触れることと民謡をきちんと聴くことです。あとは常に手首を動かして柔らかくすることですね。大学生活で楽しかったことは、3・4年生になって友達と旅行したことです。高校までは演奏中心の生活で修学旅行や遠足にも行けなかったので。つらかったことは、4年生になって進路を決める時、プロの奏者を目指すのか就職して三味線を続けるのか悩みました。その時が一番つらかったです。

―練習は自宅でされるんですか。

家で練習すると苦情が殺到するのでカラオケボックスでやっています(笑)。学校の行事で遅くなって練習時間が取れないときは、家で音を小

Interview

さくする工夫をして練習しています。

—並々ならぬ努力ですね。

ただただ好きなだけなので。釣りやゴルフを好きな方が休日の朝、早起きするのと同じ感じです（笑）。

—ずばり、三味線の良さは何ですか。

保育園の時一番感じたのは迫力のすごさです。お腹に響き、太鼓のような音がするのがかっこいいのと、細かく小さい音で弾く箇所も曲の中に必ずあり、その繊細さがすごくいいと思いました。弦楽器と打楽器の良さがあって、1曲の中で激しい部分と繊細な部分がある楽器はほかにないと思います。弦3本でこれだけの表現ができるのはすごいと思いました。

—保育園の時にそれがわかってしまうというのがすごいですよね。

もともと音楽が好きで、ピアノと三味線は小学校2年生から習っていましたが、ピアノは鍵盤が決まっていますよね。小さい頃から「こうです」と決められたことがあまり好きではなかったので、結局ピアノ教室に行かなくなり、三味線にのめり込んでいきました。

—学生時代、空いた時間はやはり練習ですか。

例えば、2限と4限に授業があって3限とお昼休みで時間が空くと、いったん家に帰り、お昼ご飯と楽器を持ってカラオケボックスに行きました。午前中に授業が終わる時は、午後フルに練習しました。もう、友達と遊んでいるのと同じぐらい楽しいので。

—楽器は友達ですか。

そうですね。もう体の一部になればいいのにと思います。そうすれば持ち歩かなくても済みますから。でも、大会前はもう練習したくなくて、一緒にいたくなくなりますが（笑）。

—座右の銘はありますか。

「為せば成る 為さねばならぬ何事も成らぬは人の為さぬなりけり」という言葉で、小さい頃祖母に言われました。すぐ無理無理と言う子でしたが、じゃあ1回やって駄目だったらやめればいいということで、嫌だと言うたびに「為せば成る 為さねば成らぬ」とずっと言われ、今でも自分の中で力をもらえるのがその言葉なので、少し難しそうだと思った時、

Interview

その言葉を思い出してやってみるようにしています。

―それがこの大会の結果に結びついているわけですね。

そうですね。最初、出場した時も5大民謡という5つの民謡が課題曲になっていましたが、出場する年まで弾けなくて一から独学で勉強しました。その時も座右の銘を思い出し、少し頑張ってみようと思ってやりました。

―すばらしいですね。卒業式で表彰されましたが、その時の気持ちはどうでしたか。

すごく嬉しかったですね。入学の頃は、三味線を弾ければ、あとは卒業できればいいやという考えでしたが、それが仁平さんの一言で変わり、そこから頑張った自分が評価された気がして嬉しかったです。また、研究基礎の所先生やゼミの吉田正人先生、そのほか多くの職員の方に支えられて卒業できたので、そういう方たちに対する感謝の気持ちがすごく大きかったです。4年間のまとめを感じた瞬間なので嬉しさと感謝の両方でした。

―大切なのは人と人とのつながりですね。

まさにそうです。卒業してしみじみ思いますが、千葉商大ほど学生に親切にしてくれる大学はないと思います。今は商大職員として、学生時代に自分がしてもらったのと同じように後輩をサポートし、卒業する時商大の卒業生で良かったと思ってもらえたら嬉しいです。

―最後に今後のキャリアビジョンをお聞かせください。

まず職員としてのキャリアビジョンは、学生からこの職員のような社会人になりたいとか、この職員のお陰で大学4年間を楽しく過ごせたとか、何かしらの学生の行動のきっかけになれたらいいなと思います。

津軽三味線のビジョンは、いずれは小学生で始めた時の夢として持っているプロの津軽三味線奏者になれればと思っています。三味線をやりたいという子どもが減ってきているので、文化の伝承ということに関しても、自分がきっかけであのような演奏者になりたいと三味線を始める人がいるのが理想です。やはり、いずれは三味線1本でやっていきたいという気持ちはあります。

―本日はありがとうございました。齋藤さんの今後の活躍に期待しています。

（4月19日インタビュー）